

岡崎城跡天守台石垣発掘調査に伴う金箔瓦の出土について（補測説明）

●天守台石垣発掘調査について

期 間：平成 30 年 8 月 20 日（月）～9 月 14 日（金）

目 的：岡崎城跡整備基本計画に伴う城郭遺構の確認調査

天守台石垣の構造、築造年代等について確認することを目的としたもの

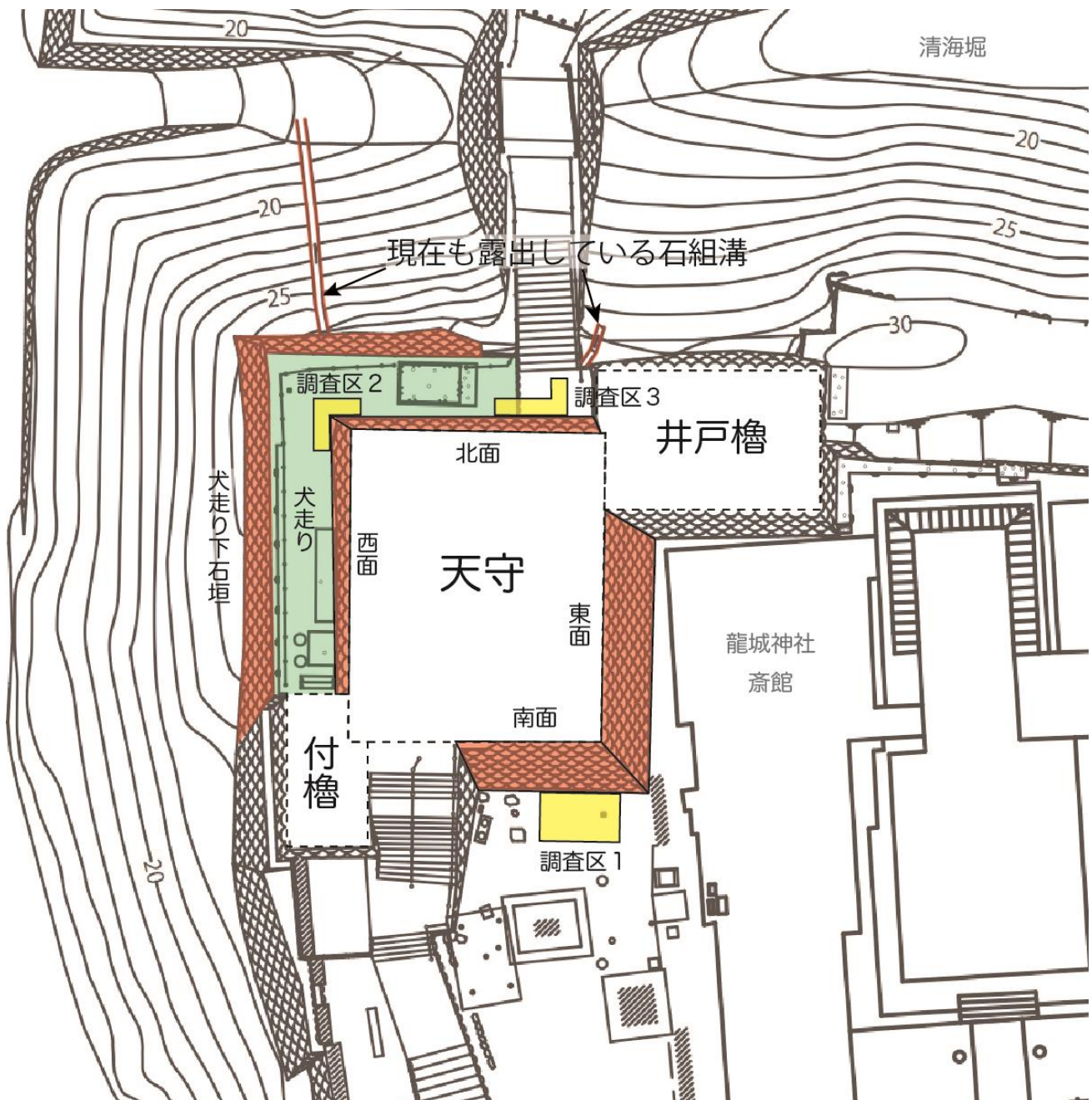
調査面積：調査区 1 - 8.5 m²

調査区 2 - 4.5 m²

調査区 3 - 3.0 m² 合計 16.0 m²

調査成果：現地説明会資料参照（別紙）

調査区 3 より金箔瓦が出土



図版 1 発掘調査位置図

●金箔瓦の出土状況

調査区3を人力での掘削中に取り上げた瓦の中に金箔瓦が含まれていた。取り上げた瓦を洗浄しようとしたところ金箔瓦であることを発見した。



写真1 調査区3全景（北から撮影）



写真2 調査区3全景（西から撮影）



写真3 調査区3東壁断面（西から撮影）

出土層位としては近世の整地層から石組溝設置のための掘り方があり、石組溝構築後の整地層と思われる土中より出土した。石組溝は近世の瓦が出土するため、構築時期は近世である。金箔瓦はその石組溝の背後の層から出土した。この層が石組溝構築時の最終段階の整地層なのか、構築後の整地層かは判別がつかない。近現代遺物が含まれないことから近世の範疇には収まるものとは考えられるが、近代に近い旧表土の可能性もある。現代の表土(砂利)の直下であることから、近世の旧表土をやや削平するように現代の砂利層を敷き均した可能性もある。いずれにせよ表土の直下層であり、出土層位から金箔瓦の価値付けは困難かもしれない。

金箔瓦が出土した調査区3からは出土した他の瓦には金箔瓦は含まれていないことは確認済みだが、調査区1・2の出土瓦については膨大であり、現時点では未点検であり今後整理作業を進めていく。

●出土した金箔瓦

中心紋様は「三つ葉葵紋」で、直径は約 11.0 cmの小菊瓦。周縁は無く、幅の狭い突帯が巡る。突帯は葵の茎部につながるため、突帯自体が葵の紋様の一部となっている。金箔は本来、紋様の凸面、突帯及びその外縁部に貼られていたと思われるが現在は部分的にしか残存していない。なお地紋（凹面）には金箔は貼られていなかったと思われる。製作年代は江戸時代初期頃（17世紀前半）と推測される。



写真4 出土した金箔瓦（正面）



写真5 金箔瓦 拡大1

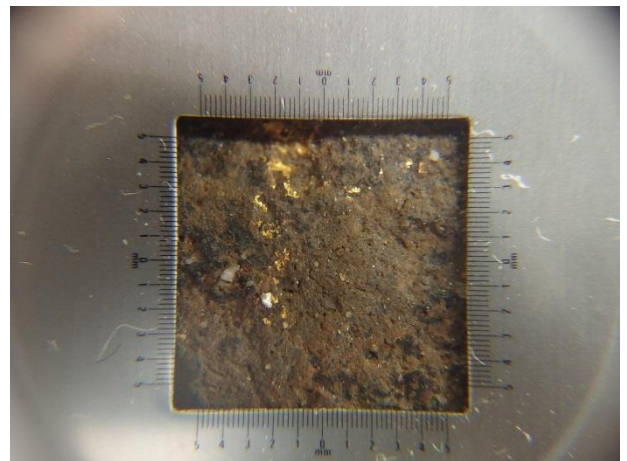


写真6 金箔瓦 拡大2



写真7 金箔瓦（側面）

●参考例

「三つ葉葵紋」を中心紋様にする瓦については、今回の調査区1の攪乱層からも出土している（写真9）。また2012年の三の丸調査時にも瓦を敷き詰めた整地層から1点出土している（写真10）。2点とも直径は9.5 cmで同じ範を使用した同範瓦である。その他、本丸龍城神社建て替えの際の調査でも1点（写真11）表採しているが、直径が10.5 cmであることや、上記2点とは細部が異なる三つ葉葵紋のため別範である。今回出土の金箔瓦は上記3点に比してやや大きく、範も異なる。

その他、発掘調査によるものではないが、採取された三つ葉葵紋の瓦もある（図版2～6）。図版2～4は今回出土のものよりもさらに一回り小型の直径8.0 cm程度の小菊瓦で、図版5・6は直径16.0 cm程あることから軒丸瓦と思われる。

いずれの三つ葉葵紋の瓦も近世中～後期の燻瓦と比べると古相を呈していることから江戸時代前半までの製作と考えられる。また岡崎城内での三つ葉葵紋の瓦自体の確認数は他の城主家紋瓦に比してかなり少ない。さらに三つ葉葵紋を中心飾とする軒平瓦は現在のところ出土していないことも特徴である。こうした出土数に限りがあり、丸瓦（軒丸瓦、小菊瓦）に限られるといった状況がうかがえ、岡崎城における限定的な三つ葉葵紋の使用を示唆しているようにも考えられる。



写真8 調査区3出土（金箔有）



写真9 調査区1出土（金箔無）



＝ 写真10 三の丸出土（金箔無）

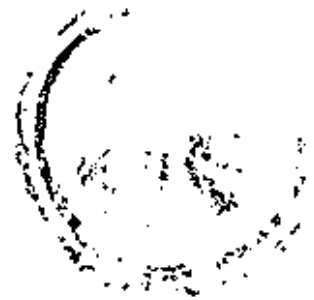
同範瓦



写真11 本丸出土（龍城神社）



図版2 採集品



図版3 採集品



図版4 採集品



図版5 採集品



図版6 採集品

【出典】

写真1～11 社会教育課

図版2～6 杉浦正明『昭和47年度版 研究紀要』

岡崎市地方紙研究会 1973年

岡崎城における徳川家との関わりと金箔瓦の出土

1. 金箔瓦の発展と衰退

織田政権下において金箔瓦が登場

織田信長が安土城において金箔瓦を初めて用いたとされる。織田家の唯一絶対性を示す象徴として使用され、出土事例も織田信長とその子息の城に独占的に認められ、それ以外の城での使用は認められない。信長が天下人として自己の権力の大きさをアピールするものとして、自身の超越性を象徴するために信長とその一族に限定的に使用したと考えられている。

豊臣政権下における金箔瓦の拡大

豊臣政権下における金箔瓦の使用は、当初は織田政権の正当な後継者の地位を明らかにする目的であったが、後には豊臣政権の優位性や経済力の誇示を目的に、政権の象徴といえるほどまでに昇華された。その一例として、東国の家康領と接する東山道沿いの拠点城郭に金箔瓦を使用することで、徳川配下の武将だけでなく街道を往来する人々にも豊臣政権の優位性や経済力の確かさを示す役割があったと考えられている。

秀吉没後の金箔瓦の規制緩和

秀吉の死後から関ヶ原の戦い後、家康が征夷大將軍となって江戸に幕府を開く慶長 8 年（1603）までの約 5 年間は豊臣政権による金箔瓦の規制は宙に浮き、家康は規制を設けるまでには至っていない状況があった。これにより一時的に金箔瓦の規制緩和が生じたといえる。

徳川政権下での金箔瓦の使用状況

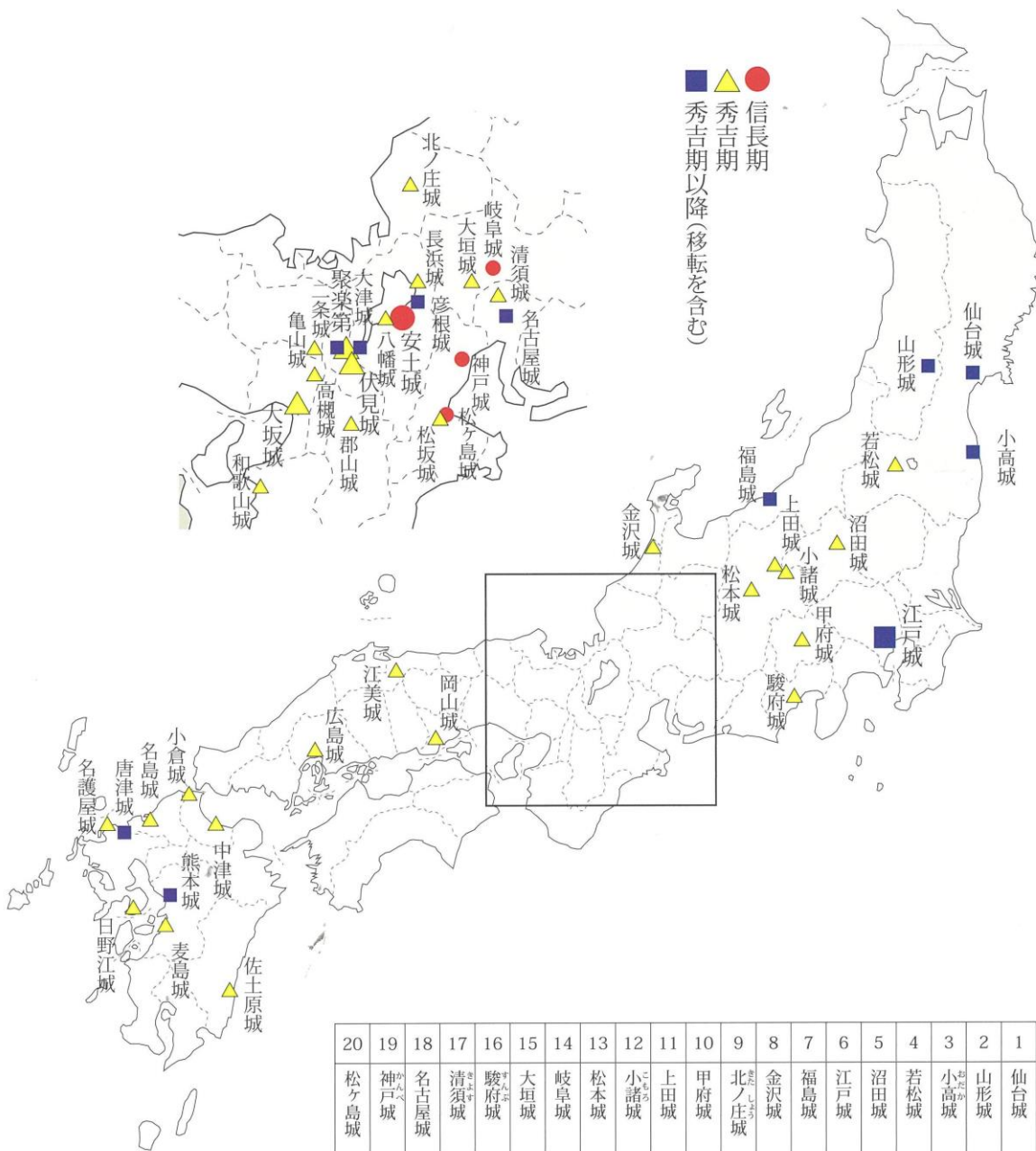
これまで金箔瓦の使用がみられなかった東北の城に金箔瓦が使用されるようになる。これは規制緩和期にあたり、豊臣政権下では使用が認められなかった城郭において、城主の判断で使用を開始した事例と解釈されている。

一方の江戸大名屋敷で金箔瓦が出土する事例については、旧豊臣恩顧の大名に使用が確認されることから、江戸幕府が金箔瓦の使用について禁止令がないために、屋敷を飾る手段として金箔瓦の使用を継続したとされる。

徳川自身は慶長 8 年から江戸城を天下普請により改修するが、金箔瓦は使用していない。家康の死後においては三代将軍・家光が将軍となった寛永期以降、家康を祀る日光や久能山等の東照宮で金属瓦に鍍金する瓦を使用するが、城郭等で旧来の金箔瓦を使用する事例はほとんど認められなくなる。城郭内の金箔瓦としては、時代が新しくなって、江戸時代中期（延享 2～3 年、1745～46 年）に名古屋城内の三の丸にあった徳川将軍家の御霊屋（霊廟）から三つ葉葵紋の陶器製の瓦に金箔が貼られた事例が認められる。

以上のことから、江戸時代における金箔瓦は規制緩和期には城郭や大名屋敷で限定的に使用されたが、そのご霊廟等に使用される物となり、使用自体も減少する。

金箔瓦出土城郭一覽



20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
松ヶ島城	神戸城	名古屋城	清須城	駿府城	大垣城	岐阜城	松本城	小諸城	上田城	甲府城	北ノ庄城	金沢城	福島城	江戸城	沼田城	若松城	小高城	山形城	仙台城	城名
三重県松阪市	三重県鈴鹿市	愛知県名古屋	愛知県清洲市	静岡県静岡市	岐阜県大垣市	岐阜県岐阜市	長野県松本市	長野県小諸市	長野県上田市	山梨県甲府市	福井県福井市	石川県金沢市	新潟県上越市	東京都千代田区	群馬県沼田市	福島県会津若松市	福島県南相馬市	山形県山形市	宮城県仙台市	所在

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	
佐土原城 <small>さどはら</small>	中津城 <small>なかつ</small>	麦島城 <small>むしじま</small>	熊本城 <small>くまもと</small>	日野江城 <small>ひのえ</small>	唐津城 <small>からつ</small>	名護屋城 <small>なごや</small>	名島城 <small>なじま</small>	小倉城 <small>こくら</small>	広島城 <small>ひろしま</small>	岡山城 <small>おかやま</small>	江美城 <small>えみ</small>	和歌山城 <small>わかやま</small>	郡山城 <small>ぐんやま</small>	大坂城 <small>おおさか</small>	高槻城 <small>たかのき</small>	龜山城 <small>かめやま</small>	伏見城 <small>ふし見</small>	二条城 <small>にじょう</small>	聚楽第 <small>じゅらくだい</small>	大津城 <small>おおつ</small>	八幡城 <small>はちまん</small>	安土城 <small>あづた</small>	彦根城 <small>ひこね</small>	長浜城 <small>ながはま</small>	松坂城 <small>まつざか</small>	
宮崎県宮崎市	大分県中津市	熊本県八代市	熊本県熊本市	長崎県南島原市	佐賀県唐津市	佐賀県唐津市	福岡県福岡市	福岡県北九州市	広島県広島市	岡山県岡山市	鳥取県江府町	和歌山県和歌山市	奈良県大和郡山市	大阪府大阪市	大阪府高槻市	京都府亀岡市	京都府京都市	京都府京都市	京都府京都市	滋賀県大津市	滋賀県近江八幡市	東近江市	滋賀県近江八幡市	滋賀県彦根市	滋賀県長浜市	三重県松阪市

*このほか、社寺、靈廟からの出土が複数確認されている(豊国神社(京都・熊本)、厳島神社、興福寺、増上寺など)。

【出典】『安土・桃山の城郭革命 - 信長・秀吉・家康と金箔瓦 - 』

高浜市やきものの里かわら美術館開館 20 周年記念特別展 図録 P40 より抜粋 (平成 28 年)

2. 徳川政権下における岡崎城の状況

天正 18 年から慶長 5 年まで、豊臣方の武将・田中吉政が岡崎城主として城郭整備が行われた。しかし、慶長 3 年（1598）に秀吉が病没し、関ヶ原の戦いで東軍が勝利した後、慶長 6 年（1601）に譜代大名・本多康重が岡崎城主となった。家康は康重に命じて大林寺と城との間の堀（大林寺郭堀）の掘削を行う等、当初は岡崎城の城郭整備にも影響を与えている。

また、家康やその後の秀忠、家光は、大坂夏・冬の陣や京都への上洛時など、西国へ行く際に岡崎城を宿泊所として頻繁に利用している。そうした中で、慶長 16 年と元和 9 年にそれぞれ岡崎城二の丸に將軍宿泊用の御殿が建造されている。また、詳細は不明だが、旧「岡崎市史」では、家康死後の寛永年間には本丸に東照宮を建立したと推測している。明和 7 年に城主となる後本多家が本丸にあった東照宮を三の丸に移転したのは確実であり、それまでは本丸に存在していたと考えられる。

また 3 代將軍・家光の段階には、伊賀八幡宮や六所神社、大樹寺などの徳川家縁故の寺社における大規模な造営や、瀧山東照宮の建立が行われことから、家康誕生地として幕府からも重要視されていたことを示している。

【文献史料】（御殿建設に関して）

『龍城中岡崎中分間記』（嘉永 2・1849 年頃成立の史書）

「一 慶長十六年癸丑大御所秀忠公御上洛之刻、御守殿豊後守御作事、惣金張付極彩色合天井」

⇒慶長 18 年（1613）に大御所家康と將軍秀忠が京都への上洛の時、守殿（御殿）を岡崎城主本多康紀が造り、格天井は全て金を張った極彩色であった。

「一 元和九亥家光公御上洛、右之御殿南ノ方本多伊勢守作事、此節両御殿共ニ用ヒ候由右之御守殿」

⇒元和 9 年（1623）に將軍家光が京都への上洛の時、前回の御殿の南の方に岡崎城主本多忠利が造った。この時、両御殿ともに使用した。

3. 岡崎城における金箔瓦の使用

今回出土した金箔瓦の製作年代は江戸時代初期（17 世紀前半）と想定されることから、徳川政権下に当たる時期に岡崎城で金箔瓦が使用された意味について考える必要があります。

徳川政権下での金箔瓦の使用は東照宮や廟^{びょうしょ}所などで確認される傾向が指摘され、城郭では金箔貼りの金属瓦を使用したと考えられる史料があります（駿府城）。このような状況下で岡崎城に金箔瓦が使用された意味を考えると以下の可能性が指摘できます。

①城内の東照宮に使用されたもの

⇒寛永年間（1624～1643）に本丸に東照宮が建立されたと想定されている。家康死後、3 代將軍・家光が瀧山寺東照宮建設や大樹寺廟所の整備をする等の家康顕彰の機運が高まったことが想定され、岡崎城内の東照宮も家光のバックアップのもと岡崎藩主・本多家により建立され、金箔瓦が葺かれたと考えることもできる。

②将軍上洛の際の御殿に使用されたもの

⇒慶長 18 年（1613）、元和 9 年（1623）に将軍上洛に合わせ二の丸に御殿を建造した記録が残ることから、将軍の使用する建物に三つ葉葵紋の金箔瓦が使用された可能性がある。

③廊下橋の渡櫓に使用されたもの

⇒出土地点を積極的に評価すれば天守台北側の廊下橋の屋根に葺かれていたと考えることもできるが、徳川家との関連性は見いだせず、可能性は低い。

いずれにせよ表土直下の層から 1 点のみの出土であり、その使用場所や時期を特定することには至りません。残された課題は多いですが、今後も城内で金箔瓦が出土する可能性が高いことが明らかとなり、さらなる調査研究が必要と考えている。

表 1 関連年表

西暦	年代	国内		岡崎					
		天下人・将軍	出来事	城主(城代)	出来事	寺社仏閣造営関係			
1550	1542(天文11)	足利将軍	室町幕府滅亡	松平広忠	家康誕生(二の丸)				
	今川氏城代			広忠死去					
	松平元康 (家康)			桶狭間の戦い					
				「権現様御縄張之由」					
				元康、織田氏と結ぶ					
				三河一向一揆起こる					
	1570(元龜1)			松平信康	家康、本拠を浜松城へ移す				
	1573(元龜4)				岡崎城改修、家臣の「岡崎在郷」				
	1578(天正6)								
	1582(天正10)								
1584(天正12)	石川数正(城代)	信長、死去(本能寺の変)	石川数正、豊臣方へ出奔、岡崎城改修						
1585(天正13)		小牧・長久手の戦い	家康、秀吉の臣下となる						
1586(天正14)		秀吉、関白就任							
1589(天正17)									
1590(天正18)	本多重次	小田原征伐	家康、関東移封	(年不詳) 天守築造、総堀構築、東海道の城下引入れ					
1594(文禄3)		家康関東移封							
1598(慶長3)		矢作川築堤							
1600(慶長5)		矢作橋(土橋)工事開始、1601年頃完成							
1600	同年	家康	関ヶ原の戦い	田中吉政	吉政、筑後へ転封				
	1601(慶長6)			康重	本多康重、入封(本多氏4代【前本多家】)				
	1603(慶長8)				康紀	大林寺郭堀			
	1605(慶長10)					上洛御殿建造(二の丸)			
	～1611(慶長16)								
	1613(慶長18)			秀忠		大阪冬の陣	家康、死去。(久能山)東照社建立	本多氏 (前本多)	天守再建
	1614(慶長19)								
	1615(元和1)								
	1616(元和2)								
	1617(元和3)			徳川家光、3代将軍に。秀忠、大御所に	大阪夏の陣武家諸法度・禁中並公家諸法度制定	(日光)東照社、久能山より正遷座	忠利	白山曲輪、東西城門、総土堀等	上洛御殿建造(二の丸)
1618(元和4)									
1621(元和7)									
1623(元和9)									
1634(寛永11)	徳川氏	徳川家光、3代将軍に。秀忠、大御所に	(日光)東照宮大造営		菅生川端石垣、西搦手門、西馬出	矢作橋(板橋)完成(以後、9回架け替え)			
1636(寛永13)									
1624-43頃 (寛永年間頃)									
1644(正保1)									
1645(正保2)	家光	宮号の宣下、(日光)東照宮と称す		水野氏	水野忠善、入封(水野氏7代)				
1646(正保3)									
1654(承応3)									
1702(宝永4)									
1762(宝暦12)				松平氏	松平康福、入封				
1769(明和6)									
1800 1850					忠肅	本多忠肅、入封(本多氏6代【後本多家】)	映世神社を本丸に、東照宮を三の丸に移転		
1900	1869(明治2)	明治時代			明治時代	天守等解体			
	1871(明治4)								
	1873(明治6)								
	1873-74 (明治6-7)								
	1876(明治9)								
	1880(明治13)								
	1912(明治45)								
1950		大正時代 昭和時代			大正時代 昭和時代	復興天守完成			
	1959(昭和34)								